

「田んぼのスイーツ」と異業種連携で農業の未来を創る (さんわ農夢株式会社)

＜法人の概要＞

所在地：香川県三豊市

設 立：平成23年4月

資本金：200万円 売上高：2,000万円（平成27年）

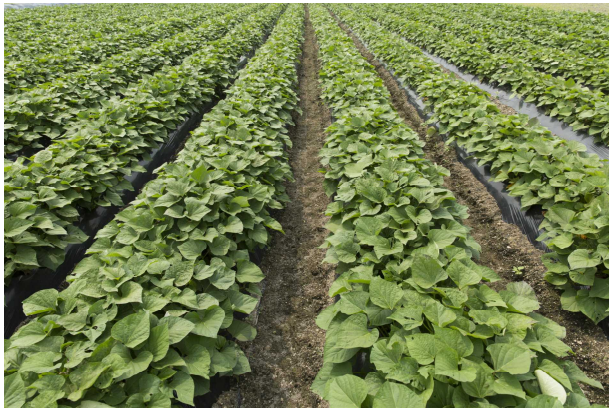
構成員（議決権）：農業従事者3名（100%）

役 員：3名（うち農作業従事3名）

従業員数：常時雇用者3名、臨時雇用者2名

経営面積：10ha（全て使用貸借、うち20aは農地中間管理機構からの借入）

作付作物：ブロッコリー400a、サツマイモ50a、オクラ15a ほか



「田」でのサツマイモ



大橋取締役（ブロッコリー畑にて）

＜営農を開始するまでの状況＞

さんわ農夢(株)は、母体である建設会社が伐採した竹の処分を請け負っていたが、資源の有効活用のため、香川大学農学部と連携して竹のチップを原料とする土壌改良剤を開発し、特性について自ら実証すべく、第2の経営の柱として農業に参入。

平成23年6月に市や地元農業委員から農地の斡旋を受け、地区内の耕作放棄地や休耕地など約1haを借り受け、ブロッコリー栽培を開始した。

平成24年からは、当社が開発した土壌改良剤を活用して田の土壌改良を行った結果、本来、砂地や火山灰地が適地であるサツマイモ（安納芋・紅はるか）の栽培が田でも可能となり、品質の高いサツマイモの生産体系を確立することができた。

栽培技術は農業改良普及員や生産農家、種苗会社などから指導を受ける。

販路は青果仲卸業者のほか、食材宅配サービス業者など独自で販路を開拓した。

＜特徴的な取組＞

公的機関に成分分析を依頼し、自社のサツマイモの優位性（高糖度、甘みと旨みに突出している）の証明ができたことから、自社ブランド芋として「弘法の恵（安納芋）」、「夢の芋（紅はるか）」の商標登録を行い、贈答用箱には総本山善通寺の法主による墨書きと朱印を使用するなど、差別化を図っている。

また、地元洋菓子店とサツマイモを活用したペーストや焼き菓子を共同開発したことから、「かがわ農林漁業成長産業化チャレンジコンペ」に採択されたほか、平成27年2月には六次産業化・地産地消法に基づく総合化事業計画の認定を受ける。

平成23年12月に農業法人、肥料会社、洋菓子店、バイヤー、金融機関等の異業種を含めた21社で「研讃会」を立ち上げ、地域農業の課題解決のための勉強会の開催、後継者の育成及び会員相互による共同の営農活動に取り組むほか、研讃会の会員（農業法人）が生産する多種多様な農産物を取り揃え、まとまった数量を安定的に供給できる共同出荷体制を構築した。（現在、研讃会の農業法人等が経営する面積は約70haに達する。）

さらに、当社は地元幼稚園児の農業体験の受け入れや学校給食の食材を納入する業者として市の指定を受けるなど、地産地消の取組も推進している。



弘法の恵（安納芋）



夢の芋（紅はるか）



販売促進用パネル

＜今後の農業経営の展開方向＞

農地中間管理機構を活用して耕作放棄地を積極的に借り入れ、経営規模の拡大と集約化を図り、新規学卒者を雇用するとともに、新規就農における農業技術の習得を支援する取組を展開する。

販路の拡大については、自社製品の輸出を行うに当たって海外での商標登録を取得し商談会へ積極的に参加するなど、海外向けの販売戦略を検討しその具体化を図る。

また、観光業との連携により観光コースに当社での収穫体験を取り入れ、体験者へ収穫物のお届けサービスを行うなど、農業と観光との相乗効果による地域経済の活性化を目指す。

今後、高齢化に伴って耕作放棄地の増加が見込まれることから、耕作放棄地を借り受けるだけでなく、地域内の農地の管理業務を担うなど地域のニーズに応えつつ、地域とのさらなる信頼関係の構築を図る。



焼き芋では糖度40度近くにも



竹のチップを使用した土壌改良剤

＜今後法人化を進めようとしている方へのアドバイス＞

安定経営を行うには、生産物に付加価値を与え、差別化を図り自らが価格決定権を持つことが重要。自ら価格決定権を持ち、安定した販路を持つことで、生産や品質管理により集中することができ、6次産業化の取り組みなどへの余裕が生まれ、安定した経営のサイクルが構築できる。

異業種も含めた連携や地域の農業者グループの取組へ積極的に参加して仲間づくりを行い、参加型の地域農業の雰囲気醸成していくことでお互いが協力し合える組織づくりを目指すべき。こうした取組を通じて共同出荷体制が構築され、年間を通じて多品目の農産物を供給することが可能となり、バイヤーと対等に取り引きを行うことが可能となる。